

基礎看護学実習Ⅱにおける学習の達成感

—— 人的環境の視点からの一考察 ——

伊 藤 洋 子

The Feeling of Accomplishment Acquired through Clinical Practices in “Basic NursingⅡ”

—— A Study from a Human Environmental Point of View ——

Yoko ITOH

要旨：看護学生にとって、臨地実習は不安と緊張を強いながらも、豊かな実りが期待されるものである。本稿は、“基礎看護学実習Ⅱ”の終了後、「実習での達成感」「それに影響を及ぼした人」「その後の学習意欲や行動の変化」について問うたアンケートを分析し、指導教員としてのあり方を再考したものである。「達成感」は、150の記録を「看護師としての能力に対する自信」「実習経験を通して得られる喜び」「他者からの支持的・受容的態度」「人間関係」「ケア提供による満足感」「ケア提供者としての役割の自覚」「物事を成し遂げる満足感」(多い順)の7つに分類した。「影響を及ぼした人」では、「患者・家族」「看護師」「臨床指導者」が多かった。「学習意欲や行動の変化」は、177の記録を「自己の成長の自覚」「前向き・積極的な姿勢の変化」「意欲の向上」の3つに分類した。指導教員としては、このような実習の価値を関係者で共有することから再出発したい。

Key words：基礎看護学実習Ⅱ (Clinical Practices in “Basic NursingⅡ”), 人的環境 (human environment), 達成感 (feeling of accomplishment), 学習意欲 (motivation)

はじめに

筆者は、長年看護基礎教育に携わってきたなかで、学生が臨地実習によって思考や行動を大きく変容させる姿を目の当たりにしてきた。臨地実習は、看護の実践を通して既習の知識や技術・態度の統合を図る場であるため、臨地実習における学習体験は大きな意味を持つ。このような学生の臨地での学習体験に関する先行研究には次のようなものがある。

杉山喜代子・鈴木治代他(1998)は、「臨地実習における学びの様相—現象学的アプローチによる体験的世界の記述—」¹⁾のなかで質的研究手法を用いて、臨地実習における学習

体験の意味の確認に関する研究をしている。また、永田博司・近藤益子他(1994)は、「看護学生における対人関係価値の学年変化—縦断的研究による内的妥当性の検討—」²⁾のなかで臨地実習での対人認知に関する研究をしている。小湊博美・木場富喜他(1998)は、「看護学生の自我同一性と時間的展望」³⁾のなかで臨地実習における学生の自己理解の高まりを示唆している。また、鎌田美智子(2004)は、「臨地実習における看護学生の思考の特徴—思考過程の分析枠組みと思考パターンの類型による分析—」⁴⁾と題して、看護師養成(三年制)課程の最終時期に、学生が臨地で体験する内面世界を、思考という観点から分

析するという研究を行っている。このように学生の実地実習における学習体験は多側面から研究されてきている。

また、本稿と同じように臨地実習における学習の達成感を人的環境に焦点を当てた研究も散見される。野崎真奈美(1995)が「臨床実習において看護学生が看護への動機づけを高めた要因の分析」⁵⁾のなかで、受け持ち患者との人間関係が学生の学習意欲に影響するといった研究を行っている。中谷啓子・丹澤洋子・中村真理子(1999)らは、「短期大学(二年課程)看護学実習における学生の達成感・満足感に影響を及ぼす要因—成人・老人看護実習における人的環境の側面から—」⁶⁾のなかで学生が感じる学習の達成感や満足感は、学生の学習意欲を刺激し、学習活動を促し、目標達成という学習成果を獲得するために重要であると考察している。また、原田慶子・阿部明美(1999)「学生の達成感・満足感から基礎看護学実習Ⅰを考察する(第3報)—達成感・満足感への影響要因より—」⁷⁾の研究では、達成感には人的環境が大きく影響するということがわかっている。しかし、いずれの研究も臨地実習における学習の達成感の内容そのものを明らかにした研究ではない。また、分析の対象となるデータや分析に用いる手法も異なるため、文献による比較検討が難しい。

本研究では、基礎看護学実習Ⅱ(1年次)終了後の学生に、臨地実習場面での達成感の内容とそれに影響を及ぼす人、達成感を得た後の学習意欲や行動の変化についてのアンケート調査を行った。その記述をデータとし、ベレルソンの内容分析の手法によって学生の臨地実習で体験する達成感を明らかにして、今後有効な指導方法を導く手がかりを得ることを目的に、この研究に取り組んだ。

用語の操作上の定義

- ・達成感とは、「ある目的・目標を達成し、

成し遂げたという主観的な感覚とそれを充分であるという学生自身の内部に生じる満足感」と定義する。

- ・達成感に影響を及ぼした人とは、「教員、臨床指導者、指導者以外の看護師、受け持ち患者・家族、グループメンバー、その他の人」と定義する。
- ・体験とは、「自分の意識の下に意識されるものではなく、何気ないものである」と定義する。
- ・経験とは、「その体験の意味を認識の下に自覚し、能動的に言葉を与え、意味あるものとする過程」と定義する。

Ⅰ. 基礎看護学実習の実習体制

1. 指導体制

学校側の指導体制は、1病棟単位に学生3～6名を配置し、1病棟～4病棟ごとに指導教員(以下、教員)を配属した。臨床側の指導体制としては、原則として専任の臨床指導者および2～3人の看護師が学生の指導に携わっていた。したがって、臨床側の実習指導方法は、実習時間中専任で指導する場合と、限られた時間のみ指導する場合、また業務と兼任の場合、常時実習場にいるが指導の専任ではない場合があった。

2. 実習指導の役割分担

学生は、臨地実習で患者個々への具体的な看護ができる技術を身につけるとともに、看護についての全体的認識を深めていくことが実習の大きなねらいである。臨床指導者および看護師は、前者を主に担当している。教員は後者を主に担当していて、臨床指導者とは互いに相補う関係であると考えられる。

Ⅱ. 方 法

1. 調査目的

本研究の目的は、基礎看護学実習Ⅱ(1年次)終了後の学生に、臨地実習場面での達成感の内容とそれに影響を及ぼす人、達成感を

得た後の学習意欲や行動の変化についてのアンケート調査を行い、その記述をデータとし、ベレルソンの内容分析の手法によって学生の臨地実習で体験する達成感を明らかにして、今後の有効な指導方法を導く手がかりを得ることである。

2. 調査対象

N県内にある短期大学看護学科の1年生で、本研究の目的や意義、倫理的配慮について説明し、口頭により同意の得られた65名(有効回答数58名、回答率89.2%)であった。

3. 調査期間

基礎看護学実習Ⅱ(2週間)終了後の2004年1月30日～2月2日

4. 調査内容

質問紙の内容は、「実習中において、どんなことに達成感を感じましたか。その内容を書いてください。」と、「そのことが、その後の学習意欲や行動にどのように変化を及ぼしたか。」の2つである。

質問紙の構成について、1つ目の質問に対して5つの欄を設け、達成感の内容を5つまで記入できるようにした。また、達成感の内容それぞれに、影響を及ぼした人を記入してもらった。人とは、西村正子・鈴木正幸らの先行研究⁸⁾により明らかになった学生の看護学実習における達成感に影響に及ぼした人である教員、臨床指導者、指導者以外の看護師(以下、看護師と略す)、患者・家族、グループメンバーを具体的に示し、さらにその他の人を加えた。また、実習場所も記入してもらった。

5. 調査方法

無記名による自記式質問調査法を用いた。学生個々の自由意志に基づき記入されたアンケートは、教員専用のメールボックスへ個々で投入してもらった。

6. 分析方法

データの分析はベレルソンの内容分析の手法を用いた。

- 1) 記録単位は、基礎看護学実習Ⅱで「達成感を感じたこと」が記述されている主語と述語からなる1文章とした。文脈単位は、記述内容の全体の文脈が理解しやすい記録全体とした。
- 2) 分析対象とする記述を意味内容の類似性に従い分類し、その分類にカテゴリーネームをつけ分類された記録単位数を算出した。
- 3) カテゴリー別に学習の達成感に影響を及ぼした人との関係を分析した。
- 4) 達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化について、2)と同様に分析した。

7. 研究上の倫理的配慮

本研究の主旨に賛同し協力の得られた学生に対し、下記の2つの事項について説明し、了解を得た。

- 1) 個人のデータについては誰のデータであるか分からないようにする。
- 2) 成果は教育研究のために公表することがあるが、公表に際して個人のプライバシーを保護する。

Ⅲ. 結果分析

1. 学習の達成感を感じた内容について (図1・表1)

1) 回答から形成したカテゴリー

学習の達成感を感じた記述内容を吟味した結果、達成感について記述のあった58部のうち、1場面を回答したものが7部、複数回答していたものが51部であった。1場面と複数場面を合わせた延べ記録単位は、157であった。157記録単位のうち記述内容が明確な150の記録単位を分析した。

150の記録単位の意味内容を類似性に基づき、対自的側面(自己評価)3、対他者の側面(他者評価)4の7つのカテゴリーに分類した(図1)。対自的側面(自己評価)は、「看護師としての能力に対する自信」(42記録単位、以下記録単位は略す)、「実習経験を通して得られる喜び」(39)、「物事を成し遂げる満足感」

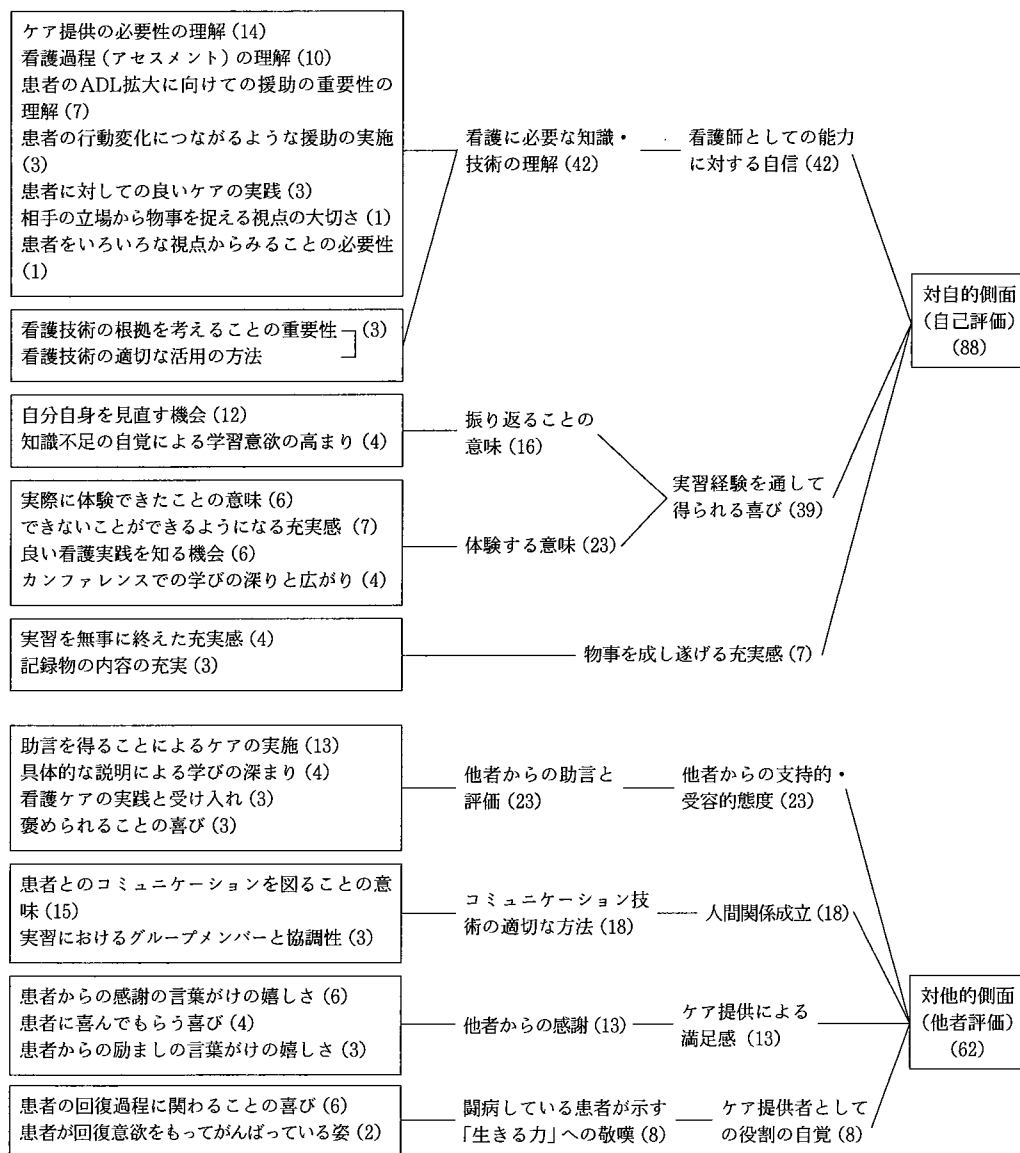


図1 学習の達成感を感じた記述内容

() は記録単位数を示す。

(7) の3つの概念に構成することできた。また、対他的側面 (他者評価) は、「他者からの支持的・受容的態度」(23)、「人間関係」(18)、「ケア提供による満足感」(13)、「ケア提供者としての自覚」(8) の4つの概念に構成することができた。

また、表1に整理してあるように、学生が

学習の達成感を一番多く感じたカテゴリーは「看護師としての能力に対する自信」(31人)であり、次いで「実習経験を通して得られる喜び」(29人)、「他者からの支持的・受容的態度」(18人)、「人間関係成立」(17人)であった。学生は実習で知識・技術の不足や未熟さを感じながら、繰り返し自己評価することで学習

表1 学習の達成感を感じた学生数および
延べ記録単位数 (カテゴリ別)
N=58 (複数回答)

記録単位数 カテゴリ	対自的側面 (自己評価)			対他的側面 (他者評価)				計
	力に 対する 自信	看護 師とし ての能 力	得られ る喜び	実習 経験を通 して	満足 感	物事を 成し遂げ る	他者から の支持的・ 受容的態 度	
1	23	21	7	14	16	11	8	100
2	5	6	—	3	1	1	—	16
3	3	2	—	1	—	—	—	6
小 計	31人	29人	7人	18人	17人	12人	8人	122人
延べ記録 単 位 数	42	39	7	23	18	13	8	150 (2.6)

() は平均記録単位数

意欲を高めていると考えられる。また、学生は、学習成果として自己及び他者から評価を得られることで、達成感を感じていると考える。

「物事を成し遂げる満足感」、「ケア提供者としての役割の自覚」、「ケア提供による満足感」の3つのカテゴリの記録単位は、ともに少なかった。基礎看護学実習Ⅱは初めての臨地実習であり、学習活動を左右する影響因子(対象となる患者の状況、周りの人間関係)や実習期間が2週間(実習日数8日)と短いため、学生は看護職としての役割を自覚するところまではいけなかったのではないと思われる。

なお、学生1人当たりの記録単位数の平均は、2.6であった。

2) 7つのカテゴリの項目分析(対自的側面および対他的側面)

対自的側面(自己評価)は、延べ88記録単位であり、対他的側面(他者評価)は、延べ62記録単位であった。

① 「看護師としての能力に対する自信」

このカテゴリは、42記録単位から形成され、「ケア提供の必要性が理解できた」(14)が最も多く、次いで「看護過程(アセスメン

ト)が理解できた」(10)、「患者のADL拡大に向けての援助の重要性が理解できた」(7)、「看護技術の根拠を考えるようになった・看護技術が身についた」(3)、患者の行動変化につながるような援助が実施できた」(3)、「患者に対して良いケアを行うことができた」(3)といった内容で、学生は看護師としての知識・技術が身につく、看護師としての能力に自信を感じていた。

② 「実習経験を通して得られる喜び」

このカテゴリは、39記録単位から形成され、「自分を見直すことができた」(12)、「知識不足を指摘され学習意欲が湧いた」(4)で、さらに、「できないことができるようになった」(7)、「良い看護を見ることができた」(6)、「実際に体験できた」(6)、「カンファレンスでの学びが深まった」(4)など、良い体験や学びができたという経験そのものが喜びとなっていた。

③ 「物事を成し遂げる満足感」

このカテゴリは、7記述から形成され、「実習を無事に終えた」(4)、「記録物を充実した内容として提出できた」(3)など、結果の良し悪しに関係なく、自分なりにがんばったということに対して達成感を感じていた。

④ 「他者からの支持的・受容的態度」

このカテゴリは、23記録単位から形成され、「看護援助を一緒に行って、助言をしてくれた・助言を得て、よいケアが実施できた」(13)、「説明がわかりやすかった」(4)、「看護ケアを一緒に実践してくれた」(3)、「(患者・看護師に)褒められことの喜び」(3)など、他者に自分の存在を認めてもらい受け入れてもらえたというものであった。

⑤ 「人間関係成立」

このカテゴリは、18記録単位から形成され、「患者とのコミュニケーションが図れるようになった」(15)、「グループメンバーと協力できた」(3)など、コミュニケーション技術を用いて他者との良い関係が図れたという

ものであった。

⑥ 「ケア提供による満足感」

このカテゴリーは、13記録単位から形成され、「患者からの感謝の言葉がけが嬉しかった」(6)、「患者に喜んでもらった」(4)、「患者からの励ましの言葉が嬉しかった」(3)など、ケアに対する患者の反応によってその効果があったと思えるとき満足感を感じていた。

⑦ 「ケア提供者としての役割の自覚」

このカテゴリーは、8記録単位から形成され、「患者の回復過程に関わることの喜び」(6)、「患者が回復意欲をもってがんばっている姿」(2)など、闘病している患者の示す「生きる力」への驚嘆を通して、回復過程にある患者に対してケアを提供するという看護師としての役割を意識していた。

2. 7つのカテゴリーの内容と学習の達成

感に影響を及ぼした人との関係(表2)

学生は達成感に影響を及ぼした人として、1つの場面において複数の人が影響を及ぼしたと回答していた。従って、以下の人数は延べ人数である。

学習の達成感に影響を及ぼした人としては、患者・家族が一番多く57人であり、次いで看護師の50人であった。以下多い順に、臨床指

導者が32人、教員は21人、グループメンバーも12人であった。その他の人としては、理学療法士が7人、作業療法士と友人がそれぞれ2人、介護福祉士と看護助手がそれぞれ1人であった。また、自分自身との回答が3人あった。

次いで、7つのカテゴリー別に学習の達成感に影響を及ぼした人の結果について述べる。「看護師としての能力に対する自信」には、ほとんどの人が影響を及ぼしていて、なかでも患者・家族が15人、臨床指導者が14人、看護師が10人と多かった。「実習経験を通して得られる喜び」では、看護師が19人であり、次いで臨床指導者の11人であった。「他者からの支持的・受容的態度」に影響を及ぼした人としては、看護師が17人と圧倒的に多かった。

このことは、臨床実習に関わる臨床指導者及び看護師は、その領域の看護に精通しており患者の最も身近な医療者であり、学生にとっては、各看護場面で受け持ち患者により良い看護を実践するという役割モデルを果たしていたと思われる。さらに、学生は臨床指導者及び看護師によって行われている患者への具体的な援助方法の実践や適切な助言を得ること

表2 7つのカテゴリーの内容と学習の達成感に影響を及ぼした人との関係

N=58 (複数回答)

影響を及ぼした人 カテゴリー	患者 家族	看護師	臨床 指導者	教員	G・M	理 学 療法士	作 業 療法士	介 護 福祉士	友 人	自 分	看 護 助 手	計
看護師としての能力に対する自信	15	10	14	7	4	3	1	—	—	—	—	54
実習経験を通して得られる喜び	7	19	11	7	3	—	—	1	1	1	1	51
他者からの支持的・受容的態度	1	17	5	3	1	—	—	—	—	—	—	27
人間関係成立	13	1	2	2	3	1	1	—	—	—	—	23
ケア提供による満足感	13	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	15
ケア提供者としての自覚	7	2	—	—	—	3	—	—	—	—	—	12
物事を成し遂げる満足感	1	1	—	2	1	—	—	—	—	2	—	7
計	57	50	32	21	13	7	2	1	2	3	1	189

注) G・Mはグループメンバーの略

で、学習の達成感を実感していた。

これに対し教員は、学生が実習で得た体験を今まで学んできた知識や技術と統合したり、看護過程の展開方法を理解し看護実践に生かせるような指導を行うことで学習の達成感に関わっていた。

「人間関係成立」では、患者・家族が13人と最も影響を及ぼしており、グループメンバーという回答も3人あった。「ケア提供による満足感」では、当然のことながら、患者・家族が13人と最も多かったがグループメンバーや友人も1人ずつあった。「ケア提供者としての役割の自覚」では、患者・家族が7人であり、次いで理学療法士の3人であった。「物事を成し遂げる満足感」に影響を及ぼす人は、教員と自分がそれぞれ2人であった。

「人間関係成立」の中で、特に受け持ち患者・家族との関わりに達成感を得ている学生が多かった。看護ケアや実習を通して患者と良い関係を結べるかどうかは看護ケアや実習の良否を決定する要因である。その患者との人間関係が成立したということは、学習の達成感につながっていた。

また「グループメンバー」との関係成立によって達成感を感じた学生もあった。学生は同年代ゆえに、互いに抱える問題を同じ目線で見ることによってわかり合え、辛さを共有しながら実習を行っていた。その過程でのグループメンバーの助けは、実習の継続支援や「やる気」の維持に関与していた。

3. 学習の達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化 (図2・表3)

1) 行動変容について

学習の達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化についての記述内容を吟味した結果、学習意欲や行動の変化について58部すべてに記述があった。そのうち、1記述の回答は8部であり、複数の記述回答をしていたものは50部であった。それらの延べ記録単位数は177であり、すべての記述内容が分析の対象になっ

た。

177の記録単位の意味内容は、類似性に基づき「自己の成長の自覚」(82)、「前向き・積極的な姿勢の変化」(51)、「意欲の向上」(44)の3つのカテゴリーに分類することができた。学生1人当たりの記録単位数の平均は3.1であり、前項の学習の達成感を感じた記録単位数の平均の2.6を0.5上回った。

また、表3に整理してあるように、学習の達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化を挙げた学生数からみても一番多く感じたカテゴリーは「自己の成長の自覚」(39人)であり、次いで「前向き・積極的な姿勢の変化」(26人)、「意欲の向上」(23人)であった。

2) 3つの行動変容の項目分析

① 「自己の成長の自覚」

「自己把握」

このカテゴリーは、35記録単位から形成され、「自分で行ったことや考えたことの振り返り」(18)、「患者の気持ちを考える必要性の理解」(6)、「自分でできることを精一杯することの意味」(5)、「根拠を考えた援助の必要性」(4)などであった。

学生は患者との相互作用の中で対象の理解を図りながら看護ケアを経験することで自己

表3 学習の達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化の内容と記録単位数 (カテゴリー別)

N=58 (複数回答)

記録単位数 カテゴリー	自己の成長の自覚	前向き・積極的な姿勢の変化	意欲の向上	計
1	15	10	8	33
2	9	9	10	28
3	11	5	4	20
4	4	2	1	7
小計	39人	26人	23人	88人
延べ記録単位数	82	51	44	177 (3.1)

() は平均記録単位数

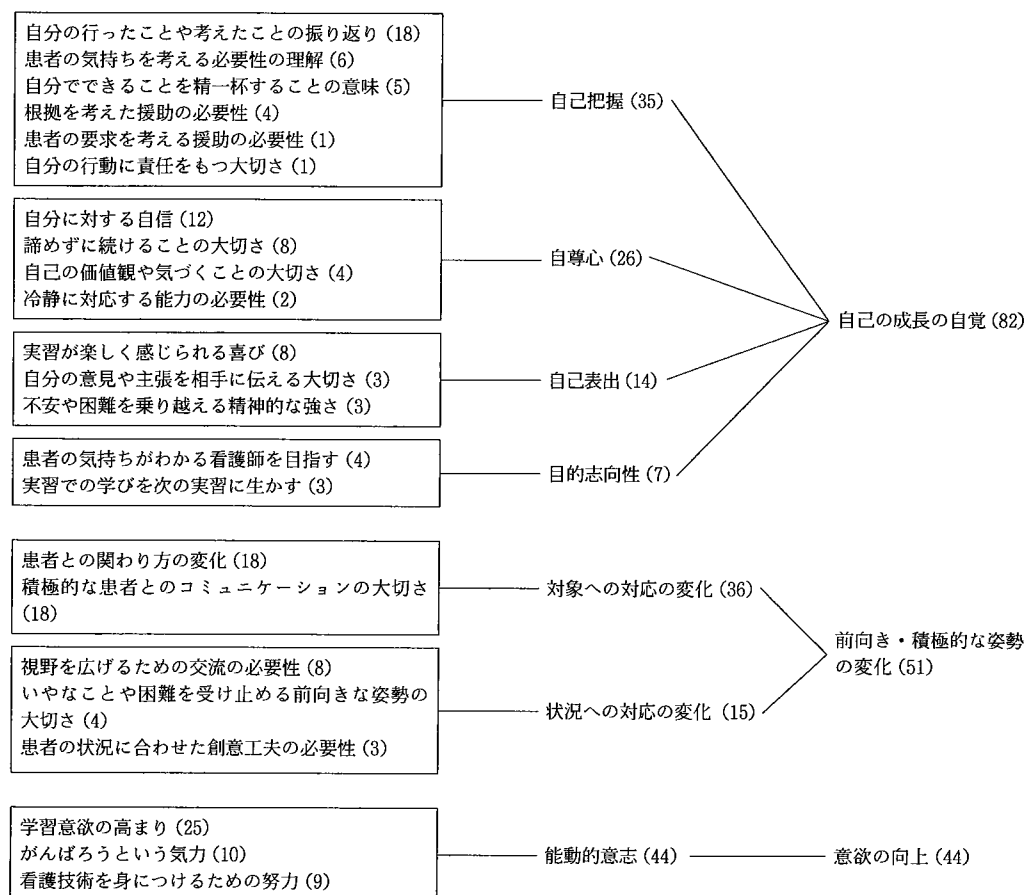


図2 学習の達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化

() は記録単位数を示す。

評価を繰り返しながら、自分に対する肯定的感情・評価をしていた。

「自尊心」

このカテゴリーは、26記録単位から形成され、「自分に対する自信」(12)、「諦めずに続けることの大切さ」(8)、「自分の価値観や気づくことの大切さ」(4)、「冷静に対応する能力の必要性」(2)という内容などであった。学生は、未熟な面を自覚しつつも実習中に多くの知識を得たこと、諦めずにさまざまな場面では他者（患者・家族や看護師）との関わり続けたことの達成感により、自信を得ていた。

「自己表出」

このカテゴリーは、14記録単位から形成さ

れ、「実習が楽しく感じられる喜び」(8)、「自分の意見や主張を相手に伝える大切さ」(3)、「不安や困難を乗り越える精神的強さ」(3)など、学生は他者との関わりの中で自分が抱いた情動や難問題のジレンマに対する解決策を見出していた。

「目的志向性」

このカテゴリーは、7記録単位から形成され、「患者の気持ちがわかる看護師を目指す」(4)、「実習での学びを次の実習に生かす」(3)など、具体的な状況を描き、将来の自己像を把握し自分がめざし、向かおうとする方向を他者との関わりの中で自己を表現する内容であった。学生にとってより身近となった看護

師の社会的役割を認識し、目標とすべき看護師を見出し、それを目標に自己実現を試みようとしていた。

② 「前向き・積極的な姿勢の変化」

このカテゴリーは、記録単位の内容を吟味した結果「対象」と「状況」への対応に分類できた。「対象への対応の変化」(36)には、「患者との関わり方の変化」(18)、「積極的な患者とのコミュニケーションの大切さ」(18)であった。また「状況への対応の変化」(15)として、「視野を広げるための交流の必要性」(8)、「いやなことや困難を受け止める前向きな姿勢の大切さ」(4)、「患者の状況に合わせた創意工夫の必要性」(3)であった。

学生は患者とのコミュニケーションを媒体にして患者の気持ちやニーズを理解したうえで、対象への関わり方や状況への対応を変化させることを学んでいた。

また、学生は患者との具体的な関わりの中から現在の自分に不足しているものを補う必要性を感じていた。

③ 「意欲の向上」

このカテゴリーには、「学習意欲の高まり」(25)、「がんばろうという気力」(10)、「看護技術を身につけるための努力」(9)などであった。学生は、臨地実習の場を絶えざる自己向上の過程あるいは自己形成の過程と捉えていた。したがって、「もっと学びたい」といった自己の成長感を抱いていた。

図2に示すように、学生の達成感はずざまな内容であった。その内容すべてが、肯定的変化を示す内容であり、否定的変化につながるような内容は見当たらなかった。達成感を感じる経験は、学生の意欲の向上や前向き・積極的な態度への変化をもたらしていて、肯定的に作用していた。

また、それ以上に新たな気づきや考え方ができるようになったなど、自己の成長を自覚したという発展性の期待ができる回答も多くあり、達成感を感じる経験の大切さを再認識

できた。

IV. 考 察

最初に、回答結果より分類したカテゴリーの内容と、それに影響を及ぼした人との関係から、特に注目すべき結果に焦点を当て、指導者側、特に教員の役割について考察する。

次いで、達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化について考察する。そして、総括として学生のニーズと教員の関わり方を述べてみたい。

1. 「看護師としての能力に対する自信」

に、より達成感を感じた学生が多いことについて

学内で学んだことを臨地実習に結び付け、実際に患者への看護ケアを通しての成功体験が、看護師としての能力に対する自信につながると思う。つまり机上の理論と臨地での実践とが結び付き、自分の行ったことが意味あるものとして認識できた時、自信につながるといえる。これらのような看護師としての能力に対する自信は、基礎看護学実習以降の実習や卒業後の仕事に対してもやる気、自己学習の力につながる大切なものである。

このカテゴリーでは、患者・家族、看護師、臨床指導者が特に影響を及ぼしている。学生は患者に対して看護ケアを行う場合、臨床指導者や看護師と行動をとることが多い。看護ケアの実施前・中・後の一連の過程における直接的な指導・助言やリアルタイムの指導者および看護師の評価によって自信を持つと考えられる。教員としては、看護師および臨床指導者が大きく影響していることを伝えるなど、仲介的な役割を果たすことが大切である。

また、羽布津は、「教員が未充足とみなされる部分を学生に返す場合、個別的な指導を行い学生が十分に理解できるように教授する必要がある、そこから学生はその事象に対する意味付け・価値付けを自ら考え、自己の看

護を深めていける」⁹⁾と述べている。このことからアセスメントにおいて教員のサポートは重要であると考えられる。教員はカンファレンスなどの時間を活用し、学生が既習の知識・理論を活用し、患者に対して行った看護ケアの根拠づけができるように意図的に関わっていく必要がある。また、学生個々の能力に合わせた個別の目標を立て、学生の能力を引き出す指導が大切である。

2. 「実習経験を通して得られる喜び」により達成感を得られた学生が多いことについて

臨地実習はそもそも実際場面のなかでの看護の習得法であり、学生は実習の渦中にあるときには、自分の態度を客観的にみつめることはなかなか困難と思われる。実際の患者を目前にして学生個人でできると判断したことが、いざ実施していくと手順通りにいかないとか、その根拠になる基礎知識の不足に気づいたり、患者の反応に戸惑うなど予想外のこともたくさん経験している。予想外や計画外のこともつ意味に気づいたときから看護がみえ、看護に対する道が開かれてくる。これらの実習の場で具体的に経験したことが、学生の看護の原体験になっていくと考える。

たとえば、学内での学びと現実の落差の発見や自己と他者の感じ方・考え方の違いに気がつくことを体験する。さらに、学生はその過程で一つひとつの実感を身体に刻みながら解決策を模索したり、これまでに学んだ知識や技術を活用するなど、ものごとを探求することの難しさを痛感すると思われる。したがって、臨床指導者や教員は、看護実践に戸惑っている学生に対し、体験からの学びの過程において指導や助言を行いながら、学習支援することが重要であると考えられる。

このカテゴリーでは看護師、臨床指導者の影響が大きい。学生が看護師として果たすべき行動や役割を学習する上で、モデリングは学習の不可欠な手段となる。教員や看護師等

の行動に影響を受けながら学習活動を遂行し、その言動を観察・模倣して看護に関するさまざまな価値を獲得する。また、西村正子・鈴木正幸らは、「周囲で働く人たちが良い手本を示すことで、さらに自分で判断して行動できる学生に成長するのではないか」¹⁰⁾と述べている。従って、臨床指導者や看護師に役割モデルとして意識して行動することの大切さを伝えることも教員の役割と考える。

3. 「他者からの支持的・受容的態度」により達成感を得られた学生が多いことについて

学生は、患者を前にしてケアを行ってよいのか、どのようにすればよいかわ不安や戸惑いを実習終了まで繰り返す感じ、さらには看護そのものを難しいと感じている。一方で、学生と患者の関係が良好で、ケアに対する患者の反応によってその効果があったと言えるときは、学生自身が満足感を感じている。

学生にとって、他者が学生自身に対して示す態度が、達成感に影響を及ぼしている。そして、他者の肯定的・支持的態度は、学生の学習意欲を促進すると考える。

臨地実習で学生と関わるとき、教員は支持的・受容的態度で関わりをもつように配慮している。しかし、結果として、患者・家族、看護師、臨床指導者が影響を及ぼしたとする学生が多く、教員の影響は少なかった。

教員は、臨地実習の場で理論と実践を結合させ、看護を深めるために、記録物を媒体にして学生に関わっている。学生の書いた記録内容を通して間接的に支持したり、患者・家族との関わりや学生の思いを受容したりするコメントとして示す場合が多い。しかし、そのような記録物に関する達成感の内容が少なかった。記録物を書くことが負担になるという学生の声をよく耳にするが、教員は適切な援助を実施する上で重要であることを学生に意識づけるとともに、コメントの伝え方を考え直す必要があると考える。

また、記録という紙面上では上手く書いていても、患者に看護ケアを実施してみて初めて達成感を感じるのではないだろうか。患者の看護ケアに直接関わるのは臨床指導者、看護師であり、教員はこれらの人々と連携・協力しながら学生指導にあたり、良い実習環境を整えることが大切である。具体的には、学生が感じている達成感には臨床指導者、看護師が大きく影響していることを伝え、影響力が強いことを意識してもらう。そして、学生はどのようなことに達成感を感じているのか、今回明らかになった達成感の内容を伝え、意図的に達成感が得られるように関わってもらう。また、教員は個々の学生の性格や学習状況などの情報を提供し、臨床指導者や看護師からは臨地での学生の実習状況や学習状況に関する情報を交換し合い、それぞれの立場で役割を果たすとともに、互いの役割を補完することも重要ではないかと考える。

4. 「人間関係成立」において、大きく影響を及ぼしているのが、受け持ち患者・家族であることについて

「人間関係成立」のなかで、特に、受け持ち患者・家族との関わりに達成感を得ている学生が多い。学生にとって、看護ケアや実習を通して患者と良い関係を結べるかどうかは看護ケアや実習の良否を決定する重要な要因である。その患者との人間関係が成立したということは、大きな達成感につながる。このことから、教員は臨床指導者と協議のうえ受け持ち患者を選択し、個々の学生の学習状況、社会性、性格傾向を考慮しながら決定する。初めての臨地実習に伴う緊張は、ときとして学生の性格傾向もマイナス面を強く意識させる結果を生むこともあるので細かい配慮が必要である。受け持ち患者との関係が円滑な場合は、感覚的に好まないことも受け入れられるように変容する可能性もあると思われる。

したがって、受け持ち患者選定時、教員および臨床指導者は、臨地実習が初めてという

ことも考慮し、なるべく学生が患者・家族と良好な人間関係を成立できるように配慮することも必要である。また、受け持ち期間中には、教員および臨床指導者が仲介し、学生が患者のベッドサイドに行きやすいような雰囲気を作ることも大切である。

5. 達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化について

学生は、患者との相互作用をきっかけにして、今までの自分が知ることのなかった自己の諸側面について知り、それを新たに自己認識や自己評価に組み込み統合していた。自分の未知の側面に対する「気づき」や自己の内面的世界の広がりに対する自己肯定感を含む回答となった。つまり、学生と患者との相互作用は自己認識の発達（自己把握・自己評価）に関与したのではないだろうか。さらに、「自己把握」や「自己評価」をより意味のあるものとして位置づけ、将来の自己成長や自己実現への努力を動機づけるという意味での発達の意義をもったことが示唆された。

6. 学生のニーズと教員の関わり方

アンケート結果を踏まえ、基礎看護学実習Ⅱにおける教員の学生への関わり方について整理したい。

1) 側にいて助けてもらいたいというニーズ

臨地実習に出た学生は、自分に自信がないため、教員や指導者がいないと心細く何をするにも怖いという気持ちを持っている。そのため、教員に不安からの保護、すなわち側にいて援助してほしいとか、具体的に教えてもらいたいというニーズを表出している。

したがって、教員は側にいて学習の“正の転移”を得られる指導・助言を行うことが重要であると考えられる。

2) 承認されたいというニーズ

マズローのニーズ階層説にもあるように、自分を一人の人間として認めてほしい、尊重されたいというニーズである。つまり、学生が行ったことや考えたことを認めて学生に“やる

気"を起こすような関わり方が大切であると考える。

3) 役に立ちたいというニーズ

学生は、患者のケアをしたいとか役に立ちたいというニーズを持っている。臨地実習において、学生は患者に援助して喜ばれたり、効果的な援助ができたときには、大変喜びを感じ、価値ある体験として自覚するようである。したがって、このような体験を持てるような指導が必要である。

4) ありのままの自分を理解してほしいというニーズ

学生は理想的な指導者像として、「自分の気持ちを分かってくれる」という内容を挙げている。青年期にある学生は、自分の内面を守っていたいという気持ちがある反面、ストレスの多い実習の中で、信頼する教員にありのままの自分を理解してほしいとか、受け入れてほしいという気持ちを持つようになる。教員は、学生のこのような気持ちに共感し、受容できるような姿勢を持つことが大切である。

5) 自立したいというニーズ

学生は臨地実習が進み看護ケアを自分でやっていきたいという気持ちが芽生えてくると、教員には困ったときだけ助けてほしいと考えようになってくる。したがって、教員は臨床指導者と連携を図りながら、学生の知識・技術の修得状況を見極め、学生が一人で看護ケアが実践できるように励まし・見守る姿勢も大切と考える。

V. 本研究の妥当性と限界

本研究は、以下のような点で研究方法上の限界を有している。対象は臨地実習での学習体験の一部であるが、そこには多数の変数が存在する。特に、学生に対する実習指導者の指導力の影響は大きいと思われる。また、分析対象となる質問紙においては、先行研究を参考にしてはいるが、一般化されていない。さ

らに、データ分析を筆者1名で行った。

今後は例数を増し、調査紙の内容や方法、たとえばカテゴリーの信頼性については、検討・改善を重ねていく必要がある。

VI. 結 論

学生の基礎看護学実習Ⅱにおける学習の達成感の内容とそれに影響を及ぼす人、達成感を得た後の学習意欲や行動の変化に関する記述内容を分析した結果、6つの結論が導きだされた。

① 58人の学生が延べ150の内容を記録していたが、臨地実習における学生の達成感として、「看護師としての能力に対する自信」、「実習経験を通して得られる喜び」、「他者からの支持的・受容的態度」、「人間関係」、「ケア提供による満足感」、「ケア提供者としての自覚」、「物事を成し遂げる満足感」の7つのカテゴリーに分類できた。

② 特に多くの学生が達成感を感じたのは、「看護師としての能力に対する自信」、「実習経験を通して得られる喜び」、「他者からの支持的・受容的態度」、「人間関係」であった。その達成感に影響を及ぼした人で多かったのは、患者・家族、看護師、臨床指導者であった。

③ 学習の達成感を感じた後の学習意欲や行動の変化としては「達成感の内容」よりも多くの記述があり、「自己の成長の自覚」、「前向き・積極的な姿勢の変化」、「意欲の向上」といった3つのカテゴリーに分類でき、肯定的な変化が見られた。

④ 学生と患者との相互作用は自己認識の発達（自己把握・自己評価）に関与するとともに、将来の自己成長や自己実現への努力を動機づけるという意味で発達の意義をもったことが示唆された。

⑤ 学生は臨地実習を通して、^{そば}側にいて助けてもらいたいというニーズ、承認されたいというニーズ、役に立ちたいというニーズ、

ありのままの自分を理解してほしいというニーズ、自立したいというニーズなど、5つのさまざまなニーズをもっていた。

⑥ 教員の役割としては、このような実習の価値を関係者が共有できるようにするとともに、既習の知識や技術を臨地実習に結び付けられ、実際に患者への看護ケアを通しての成功体験に繋がるように、今後さらに、臨床指導者や看護師との連携を図っていくことが大切と思われる。

今後の課題

基礎看護学実習Ⅱにおける学習の達成感に人的環境がどのように関わっているのかについて述べてきた。その中で学生は「対象個々に応じた看護ケアの実践を学ぶこと」、「看護体験を通して自己理解を深めること」、「専門職の価値観を育むこと」など、臨地実習の意義を学んでいたことを再確認できた。看護教育における実習の意義は大きいので、今後も学生への実習指導のあり方、方法論の検討を行っていきたい。

引用文献及び参考文献

- 1) 杉山喜代子・鈴木治代他：臨地実習における学びの様相－現象学的アプローチによる体験的世界の記述－。看護研究, 31 (3), 39-52, 1998.
- 2) 永田博司・近藤益子他：看護学生における対人関係価値の学年変化－縦断的研究による内的妥当性の検討－。看護研究,

27 (1), 41-47, 1994.

- 3) 小湊博美・木場富喜他：看護学生の自我同一性と時間的展望。鹿児島純心女子大学紀要, 3, 63-69, 1998.
- 4) 鎌田美智子：臨地実習における看護学生の思考の特徴－思考過程の分析枠組みと思考パターンの類型による分析－。Quality Nursing, 10 (2), 51-63, 2004.
- 5) 野崎真奈美：臨床実習において看護学生が看護への動機づけを高めた要因の分析。日本看護科学学会誌, 15 (2), 181, 1995.
- 6) 中谷啓子・丹澤洋子・中村真理子：短期大学（二年課程）看護学実習における学生の達成感・満足感に影響を及ぼす要因－成人・老人看護実習における人的環境の側面から－。東海大学短期大学紀要, 33, 31-38, 1999.
- 7) 原田慶子・阿部明美：学生の達成感・満足感から基礎看護学実習を考察する（第3報）－達成感・満足感への影響要因より－。日本看護学教育学会誌, 8 (2), 74, 1999.
- 8) 西村正子・鈴木正幸・添田晴雄：臨床実習による「学生の変化」に関する調査研究－影響を受けた人的環境－。看護展望, 18 (8), 78-83, 1993.
- 9) 羽布津美雪：臨床実習評価が学生に与える影響－やる気に焦点を当てて－。神奈川県立看護教育大学校看護教育研究収録, 25, 122-128, 2000.
- 10) 前掲, 看護展望, 79.